武装神姫-造作剣客戦記-

えーさく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
武装神姫－造作剣客戦記－

【Ｎコード】
Ｎ８１６１Ｘ

【作者名】
えーさく

【あらすじ】
西暦２０３９年――神姫の登場より３年。
神姫に既存の模型等を改良し、専用オリジナル武装を造る『アーキテクト』と呼ばれる者達の時代を築いた少年が居た。その名は――二之宮（にのみや）　衛士（えいし）。ファーストアーキテクトにして、２０１１年の平行世界の過去よりやってきた彼と神姫達が綴る物語は、果たして……。
※冬沢　紬さんの武装神姫　～Ｖｅｕｉｌｌｅｚ　ｍ'ａｉｍｅｒ？　ｊａｍａｉｓ～に投稿したオリキャラと神姫を中心にした無駄に暑苦しいかもしれない武装神姫の二次創作物です。暇潰しにお

読みください。

予告編（前書き）

予告編的なノリで……

予告編

トリップとか憑依とか転生とか、あったら良いなと思う。
そんな時が私にもあった。軽く17年前まで……。

「相手は同じアーク型だが、いけるな？ことり」
「もちろん。心配は要らないよ、衛士くん。……眼前の敵はすべて斬り散らすのみ！」
「愚問だったな。お前には」

―神姫（しんき）―

全高15cmのフィギュアロボットであり、人間と同じく心と感情を持ち、人々の良きパートナーと言える存在だ。
2036年から登場し、4年経った2040年現在。神姫は人々の日常の一部としてその存在を確立している。
そして神姫は時に武装し、戦うこともある。
全国展開される現在最大規模の娯楽でもある。
そして神姫の普及と同時に現れ始めたアーキテクトと呼ばれる存在。

彼等は武装する神姫の機能を隅々まで把握し、既存の模型を神姫に取り付けられるように模型を改造、制作する者達を言い。今では国家資格にまで発展した存在である。

そんなアーキテクトの時代の先駆者にして開拓者にして、２０１１年の過去からやってきた１人の少年と神姫達が紡ぐ戦記である。

PROLOGUE（前書き）

とりあえず主人公の身の回りの説明から？

PROLOGUE

「ありがとうございました！」

「私からもお礼を。本当にありがとうございます」

「や、それが私の仕事だ。しかしパーツが馴染むまでバトルは厳禁だ。わかったな」

「はい！」

去っていく下級生の男子とジルダリア型の神姫を釘を刺しつつ見送る。

アーキテクトとしての活動の傍らの副業として始めた神姫の修理。

アーキテクトという存在が世に認められ始めたお陰で、こうして無償で神姫の修理も出来る。

―アーキテクト―

神姫デザイナーとは違うが、一般には一緒に見られている者達。

しかし神姫デザイナーは、神姫その物や武装の新規デザインをする人を指すが、アーキテクトは違う。

アーキテクトは完全オリジナルの神姫を造ったり、プラモを改造して神姫の武器とする人を指す。

難易度や熟練度は神姫デザイナーを凌駕すると専門家に言わしめる者達である。

理由は大まかに、神姫デザイナーは新しく一からデザインして、武装周りもその神姫に合わせて造るだけだが、アーキテクトの場合、規格の違う物や、デザインはあっても立体化されていない物を造るとあって、手間も時間も費用も馬鹿にならない。しかも自作関係は審査も厳しい。

自分含め、そんな社会的に弱い立場のアーキテクト同志諸君の為に、私は行動を起こし、2年半。ようやくのこと、私達はアーキテクトを世に認めさせた。今や国家資格にまで発展したアーキテクト。

そのお陰で高校生の現在も仕事とお金がまわって来る上、神姫を知り尽くしたその知識を生かして、壊れた神姫の修理等も行っている。

「まさかな。いくら武装紳士だった私とはいえど、こんな人生を送ることになろうとはな」

私は所謂転生経験者である。

そう、あれは今から17年前の春先の事だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ー17年前ー

「よっし！これで完成だなっと！」

身体を伸ばし、関節がポキポキ音を立てる。

苦節半年。

机の上には鎧武者を着込む少女のフィギュアがある。

武装神姫ハイスピードトライク型アーク

それにガ〇プラのスサノオを改造して着せた物だ。

アーク本体をいじらず、スサノオの方をいじって装備させている為、他の神姫にも装備出来るのがちょっとした自慢。

武装紳士ならば本体をいじるなど言語道断だ。

「ハァ……コレで神姫が動けば文句なしなんだけどなぁ……」

２０１１年現在。

未だにロボットの二足歩行に苦労する今日。

神姫が動き出す設定は２０３６年。約２５年後に本当に動くか微妙。

しかもその時俺はアラフォーだぜ☆

止めよ。言ってるとなんか悲しくなる。

「茶でも飲むか…」

作業机から立って、脚をほぐしながら、台所に向かった。

「あり？茶っ葉が切れてーら」

仕方がない。コンビニ行くか。

コートを羽織って外に出る。

冬を目前に待つ秋の寒空を見上げながら歩く。

もう少しでバトマスの次作が発売するんだよなぁ～。いやいや、それの前に完成して良かったぜ。

「次はツガルにギャプラン着せてみるか」

ツガル型の武装は本当ギャプランが似合いますよ～な感じだ。形似てるし。

次の改造手順を考えながら、ケータイで音楽を聴いていた俺は気づかなかった。

信号無視で突っ込んで来る一台の大型トラックに。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

あれからテンプレなんぞ無く。

気づいたら首吊り自殺体に憑依していて、自分が死ぬ前に薄れる意識を繋いで脱出したが、それから数年は大変だった。

当時の自分が転生？憑依？したのは小学生の男の娘だった。

格好を変えるだけで女の子だったからな。男と証明するのは衛士という名前ぐらいだった。

一二ノ宮（にのみや）　衛士（えいし）一

当時衛士は、その女の子然として容姿をつけ込まれ、虐められ、学校に居場所はなかった。

そこにきて両親が交通事故で死んだ。

虐められて他人を信じれず、頼れる両親も居なくなった彼が取った行動は自らの死だった。

そんな死に体に転生憑依してしまった私は、先ず自分の状況を整理した。

とりあえず自分は死んだだろう。間違いなく。あれが俗に言う転生トラックなのかはわからない。私はカミサマに会わなかったからな。

とりあえず、二ノ宮衛士には悪いが、死ぬなど一般ピーポー武装紳士の私には無理だった為。私が二ノ宮衛士としてこれからを生きる事にした。

それから孤児院に入り、今の家に引き取られ、『俺』から一人称が『私』に変わり、剣術を学び、中学校は3年連続で剣道部だったが、中学校1年の時。私の運命は大きく変わった。

２０３６年、神姫の登場とアーキテクトへの道だ。

ただ単純に武装神姫がない未来に転生憑依したかと思っていた私は、この時だけは狂喜乱舞したものだ。

相変わらずプラモはいじっていた為。私は自分の神姫を買う為に、武装を売る商売を始めた。

その為に大学受験が裸足で逃げ出す猛勉強をしたがな。

最初は神姫を持つ友人とネットブログから、口コミやらで少しずつ名は売れ始めたが、アーキテクトが神姫デザイナーの成り損ないや、社会的に神姫デザイナーと同一視されているのが、私は我慢ならなかった。

神姫デザイナーをどうこういうつもりはない。だが、最初は神姫を買う為に始めた私にも、アーキテクトとしての矜持をしっかりと持っていた。今の家で剣術や武士道精神を学んだが故に、その矜持は頑な確かなものだった。

私は知り合った他のアーキテクトや神姫オーナーと共に行動を起こした。

署名と直送書を何度も国に送り、アーキテクトの存在を訴え続けた。

神姫バトルのリアルファイトやバトルロンドでも、私達アーキテクトが造る武装が活躍したことで、私達アーキテクトの存在は、社会に認められていった。

そして今年、２０３９年から、アーキテクトは国家資格となり、ランクによるが、国からも補助が出る事になった。

アーキテクトは最上位のＳランク、特Ａランク、Ａランク、準Ａランク、Ｂランク、Ｃランクがある。

Ｃランクは比較的、そこまで難しくはなく。勉強次第では中学生にも取れる資格だが、Ａランクより上ははっきりいって神姫デザイナーよりも知識と技量が必要になり、Ｓランクはもはや化け物と言わ

れている。

ちなみに私は特Ａランクである。

Ｓランクは、特Ａランクであり、さらにオリジナル神姫を個人で造れる技量を持つアーキテクトがなれる物で、さすがに私もそこまでのレベルには至っていないし、至る気もない。

今の特Ａランクでも十分満足であるし、Ｓランクは企業からのオファーがうるさいからだ。

将来神姫と関わりながら剣の道を往こうと思う私にはこのポジションが丁度良い。

「さて、今日は予約もない。久しぶりに街に出てみるか」

中学３年間は剣が７、神姫が３でやって来たが、高校に上がると同時に全国神姫アーキテクト委員会の委員長になってからは、神姫が６、剣が４の生活を送っている。

特Ａランクの私ごときがアーキテクト委員会の委員長を務めているのは少々対外的にはアレなのだが、周りから祭り上げられてしまったとはいえ、辞退するのは武士道精神と武装紳士のプライドが許さず、委員長をやっているのだ。

「そう言えば、来月からだったな」

２０４０年――ヴァーチャルリアリティ技術の革新によって、人は擬似的に神姫と一体となり、意のままにコントロールできるようになった。

これを”神姫ライドシステム”という。

その神姫ライドシステムが、来月からゲームセンターに実装される。

２０３９年も残すところ数ヶ月。

神姫と一体化との触れ込みから、神姫人気の追い風となるだろう。

「いよいよ。２０４０年か…意外と長かったな……」

私は空を眺めながら歩き始めた。

ACT・1

ＡＣＴ．１『２０４０年のセカイ』

２０４０年――ヴァーチャルリアリティの技術の革新によって、人は擬似的に神姫と一体となり、意のままにコントロールできるようになった。

これを”神姫ライドシステム”という。

そんな２０４０年春。

高校２年になった私は、相も変わらずアーキテクト兼学生として過ごしていた。

放課後。

今日は特にこれといった用のなかった私は、真っ直ぐ家に帰った。

「お早いお帰りで、隊長」

「ああ、ただいま」

私を出迎えたのは銀髪のムルメルティア型神姫。名はラウラ。

２年前から家にいる神姫であり、マスターは一応私である。

ラウラを手に乗せ、自分の部屋に向かう。

部屋で普段着としている道着と袴姿になる。ちなみに上は白で下は紺色だ。

身も心も引き締まるが、１０年以上着慣れた格好故に、これでなかなかとても落ち着けリラックス出来るのだ。

「さて、ラウラ、パーツの馴染み具合はどうだ？」

ラウラはバトルロンドよりリアルファイト派の神姫の為、損傷の度に修理と定期的にオーバーホールを行っていて、新しくしたり修理したパーツが馴染むまでバトルを禁ずるのが私流だ。

そんなラウラもここ３日程は、バトルせず、学校にも連れて行かずに家で大人しく待っていた。

「ハッ！既に戦闘行動に支障なきレベルに馴染んでおります。ムルメルティア型ラウラ、いつでも出撃可能です」

「良し。ならば今日は戦場へと往くか」

「了解！」

敬礼する小さな兵士を肩に乗せ、鞄を肩に掛けて私達は一路秋葉原へ向かった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

秋葉原・神姫センター

今も昔もヲタクの聖地、秋葉原。

その地にある神姫センターは、東日本神姫オーナーの聖地でもあり、初心者からプロまで犇めき鎬を削り血潮たぎらせる激戦地でもある。

神姫バトルコーナーを見てまわりながら、あいているリアルバトル筐体を探す。

神姫バトルには今のところ３つのバトル方式がある。

１つ目は－リアルバトル－

これは実際に神姫同士が生身でぶつかり合うリアルファイトだ。当然ＣＳＣが破壊されて事実上の”死亡”となる神姫も存在する。

しかしある程度の武装紳士・淑女協定はあり、『過度に致命的部位

への攻撃は仕掛けない』などの配慮はある。ちなみに、予算の足りない大半の高校の神姫研究会はリアルバトルでレベルアップを図っている。そのため同好会・研究会上がりのマスターは自分でのリペアスキルが相当高いのもまた事実。武装レギュレーションも緩い為、アーキテクトの卵がこぞって使用するバトル方式だ。

２つ目は－バトルロンド－

これは神姫自身は戦わず、筐体でバーチャルの神姫同士が戦うのを観戦するバトルだ。神姫が傷つかずにバトルできる上に、オンライン筐体につなげば全世界のマスターとバトルできることから、これが一番人気が高い。ちなみに、公式戦も大体がコレで行われている。

ただし、オリジナル武装の登録には何度か神姫センターに行き、審査・認定・登録・スペックの公表をしなければならないなど、アーキテクトから言わせれば手続きが面倒である。

最後の３つ目は、ここ数ヶ月前から登場し、人気を集めている”神姫ライドシステム”という、神姫をマスター自身が実際に操作して戦うバトル－バトルマスターズ－だ。

しかしいくら操作すると言っても、行動の主導権は基本的に神姫の方にあるので、残念ながら神姫との親密度が低いと思うように操作できなかったり、レスポンスが下がったりする。しかも神姫の特性を理解し、大量の情報を処理しながら戦わなければならず、自分の身体を使った戦いに慣れていない初心者にもあまりオススメ出来ず、恐怖心の克服や戦い慣れするのに時間もかかるという１段レベルの高いバトルと言えるだろう。

一台のあいた筐体の席に座り、ラウラに武装を施す。
全体的な色は簡単に言ってしまえば所謂トロンベカラー。
細身だがゴツ味のある装甲。
わかる人間はこう言っただろう。
武者我亜里怨もといガーリオン・カスタム　無明と――

ガーリオン・トロンベをベースにカスタムしたプラキットに、ＯＧクロニクルＶＯＬ１のガーリオン・カスタムに装備された追加ブースターを装備した超突撃仕様の装備であり、シュツルム・トロンベとの愛称あり。衛士の同志のアーキテクトに言わせれば、マ改造もマっ青のイロモノ。

武器は標準装備のマシンキャノンとブースターのホーミングミサイル、バーストレールガン、ソニックブレイカーであるが、シシオウ・ブレードとコールドメタルナイフを装備する。

戦車型の彼女にこんなイロモノ剣撃装備をするのは愚を通り越しただの馬鹿であり、私の居た２０１１年のバトルロンド要素ならまず勝てずな装備だが、この世界の神姫は時間と共に、人間と同じように成長する。

私と同じく剣術を教えられた彼女は、紅緒やサイフォスを超える近接適性の持ち主なのだ。

「このずしりと重い重量感。腰の得物の重さたるやなんと心地良き

ことか……」

感無量という表情の彼女に、２年前とは大違いだと思う。

２年前までは、彼女も戦車型の名に恥じない大艦巨砲主義者だったのだが。

ある時、依頼された武装をテストしたかったのだが、依頼者は関西在住で、仕方が無くラウラに試用を頼んだのがきっかけ。

その時は戦術機の『撃震』だったが、それからというものと、私の家族に刺激され、今の彼女が誕生したのだ。

閑話休題。

シュツルム・トロンベを身に纏った武者ラウラの身に纏う雰囲気は、元来の軍人気質プラス武人と言った感じで、シュツルム・トロンベと合わせてかなりの威圧感と迫力を醸し出していた。

「さて、問題は挑戦者がいるかどうかの……」

「すまない、対戦相手、よろしいか？」

私に声をかけたのは、ストラーフＭｋ．２を肩に乗せた青年だった。

「ええ。別によろしいですよ」

私は挑戦を了承し、筐体の昇降機にラウラは飛び乗り、見事なガイナ立ちを披露する。装備が装備故、無駄にカッコ良く見える。

相手はストラーフＭｋ２で名はライ。

マスター名はシデンか……。

装備はＭｋ２のフル装備か、往けるか。

「オレはシデン。まぁ、オーナー名だけどな。こっちは相棒のライ、よろしく」

「よろしくね！」

クールなストラーフＭｋ２にしては元気な子らしい。マスターとの相性も良いらしい。

「二ノ宮衛士。戦友のラウラだ。よろしく頼む」

「ヒュー！ファーストアーキテクトさんだったか、その武装を装備した神姫と戦えるなんて、ラッキーだな今日は」

「大丈夫かな～？リアルバトルだからちょっとコワいよ」

まぁ、向こうのストラーフの言い分もわからなくはないな。
リアルバトルでは、神姫が”死ぬ”こともあり、シシオウ・ブレードは刃は潰しているが、突きを放てば突き刺さるし、ラウラの腕なら刃を潰した刀でも、神姫のボディを断つ事も可能だ。

「怖がるぐらいならば戦場に出てくるなと言いたいが、それも仕方が無きことか。戦場を知らぬヒヨッコに、戦場とはなんたるかをおしえるのも先達の役目というものだ」

なおもガイナ立ちで言うラウラだが、言葉が悪いぞお前。

「すまない。コイツは見た通り軍人気質で不器用故に、言葉が悪い。気を悪くしないでくれ」

「いやいやいや、ファーストアーキテクトの神姫ともなれば場数だって違うでしょう。コイツも起動してまだ2ヶ月ですから。かと言って、手加減は不要ですよ」

「そのとーり！全力全開でバッチコーイ！！」

「フン、威勢は良いらしいな。ならば私も全力全壊で相手をしよう！」

”ぜんかい”のニュアンスが違う意味で聞こえるのは私の気のせい

か？

「ラウラ」

「ハッ！」

私が呼ぶと、ラウラはこちらに振り向き、無駄のない動作で敬礼した。

「愚問だろうが、必ず勝てよ」

「わかっております。兵士に敗北はありません」

昇降機が降り、ラウラが筐体のフィールドに降りていった。

ACT．1（後書き）

さて、のっけからヤヴァイ装備の登場です。はい。

次はバトルです！

上手く書けるか不安だ……

誤字を修正しました。

ACT・2

ＡＣＴ．２『黒い剣嵐（けんらん）』

戦車型ＭＭＳムルメルティア――大量生産されたその一個、ラウラと名付けられたのが私だ。

２０３８年の４月５日が私が生まれた日だ。

今の二ノ宮隊長は都合３人目の私の指揮官だ。

最初の１人は、私の使いにくさに勝手に失望し、１ヶ月経たずに私を手放した。いや、自分を消されるのを恐れた私が自ら切り捨てて逃げ出した。

２人目は今の二ノ宮隊長より数歳離れた言わばヤンキーの青年だった。

青年はストリートファイターであった。

―ストリートファイター―

ここでは神姫を使ったストリートファイトをする者達の事を指す。

ストリートファイトはルール無用の何でもありのデスマッチ。リアルバトル以上に”死”と隣り合わせだった。

レギュレーション違反の武器が当たり前の場で、私は自分の武器を

使い続けた。

それは軍人気質の性格設定をされた自分の意地か誇りかはわからなかったが、終ぞ私は規定武装で戦った。

しかし相手方はなんでもありだ。武装の違法改造やソフトウェアの書き換えもなんでもだ。

私もまた、そうされた。

元々逃げ出した野良神姫。拾ってくれた恩のある青年には逆らえなかった。

ソフトをいじられ、見境無くただ戦う為だけ、破壊するだけの存在。

何人の神姫を殺したかも、数えてはいない。

しかしそんな私だ。ツケがきたのか。

私とて負ける時が来た。

戦車型の私は、懐に入られれば弱い。胸を深々突き破る刃。

不幸中の幸いはＣＳＣを砕かれなかったことか。だが機能中枢が集中する胸部を貫かれたのだ。

あのままなら、私は死んでいただろう。

青年は敗れた私を拾い、直すことはなかった。彼は修理技能を持ち合わせていなかったからな。

神経系をやられたのか、私の身体はぐったりして動くこともなかった。後はバッテリー切れで機能停止。そのまま朽ち逝くだけだっただろう。

だが、マスターを見限り切り捨て、神姫を殺した私にも、神は3度目の正直。3度目の機会。3度目の奇跡を、私にくれた。

私を拾い上げたのは、鴉の濡れ羽色のようなしっとりと艶やかな長い髪を持った美少女だった。

一瞬合わされた目線に釘付けになった。

その眸は、美少女の顔にはアンバランスな、まるで血のように赤黒く、鋭い眼光を放つ切れ目の眸が私を見ていた。

「この刺し傷。ストリートファイト……か？まったく、コレだから最近の若僧は、神姫をいったいなんだと思っている」

初めて聞いた声は鈴の音のように美しかった。しかしその中は激しい憎悪に満ちていたのも然りだ。

「待っていろ。必ず私が直してやるからな」

小さな身体を胸に抱かれた。

薄ぺらかったが、どんな豊満な胸よりも包容力に満ちた胸だと、その時の私は包まれる安心感と共に思った。

そのあとは語るべきことはないだろう。
私は二ノ宮隊長の指揮の下、戦場を駆け馳せた。

あとから二ノ宮隊長が男と知った時は、さすがに詐欺だと思った。
現に街中を歩けば必ず1回はナンパされるからな。

閑話休題。

私は昇降機が降りる間、刹那に過去を思い出していた。
隊長と巡り会えたお陰で、私はまだ生きている。隊長と巡り会えたお陰で、多くの戦友を得た。隊長と巡り会えたお陰で、違う生き方も見つけた。
故に私は、たとえどのような相手だろうとも、負けるわけにはいかないのだ。

「たとえ相手が最新型だろうとな」

ストラーフＭｋ２。その戦闘能力は未知数だが……私は負けん。

Ｒｅａｄｙ…

兵士であり、剣士である私に許されるのは…

3…

ただ――

2…

己(おのれ)の――

1…

勝利のみッ！

ｓｔａｒｔ！

「いくぞォーーー！！」

「二ノ宮ラウラ……推して参るッ！」

視界がＨＵＤに切り替わる。

各種ステータス・オールグリーン。当たり前だ。誰が整備していると思っている。

ファーストアーキテクトにしてＮｏ．１アーキテクトの隊長が……二ノ宮衛士が、私の為だけに、私の為に製作・調整した武装に、問題点などあるわけがない！

ストラーフＭｋ２がハンドガンを撃つが、それで止まるほど、傷つくほど、私のトロンベは柔ではないッ！

弾丸を避けるまでもなく、装甲が弾いていく。

それに相手のライは信じられないといった表情だが、その程度で戦場で呆けるとは、やはりヒヨッコだな。

「撃て！トロンベよ！」

バーストレールガンを撃つ。

放つ弾丸は真っ直ぐライのリアパーツのアームが保持していたハンドガンを撃ち抜き、吹き飛ばした。

「くっ！…うぉぉぉぉーーーー！！！！」

武器を弾かれたライは、リアパーツから大剣を抜いてブーストをかけてきた。

詰まる間合いだが、トロンベを駆る私には、圧倒的に遅すぎた。

「やあああああーーーーー！！！！」

ライが大剣を振り下ろした。それすらスローモーションだ。

やはり隊長や教官達の疾さには圧倒的にレベルが足りない。

私は半身を右に移し、振り下ろされた刃を回避する。

ライは剣を振り下ろした体勢から、目だけ辛うじて私を見ていた。

化け物――

その眼が、私に語っていた。

「はっ！」

「くっ、ああああああーーーーー！！！！」

重い後ろ回し蹴りを放ち、ライを吹き飛ばす。
中る直前に、リアパーツのアームを盾代わりにしたのと、己の得物を手放さなかったのは、評価はしてやるか……。

「貴様には強さが足りない」
「くっ、そんなこと――」
「貴様には意志が足りない」

私はライの反論を遮る。もとより返事は聞いていない。
これは先達が送るだけの言葉だ。

「そしてなにより――」

右腰のシシオウ・ブレードに手を添える。

「疾(は)やさが足りない」

フルブースト。

「駆けろトロンベ！その名の如くッ！！」

視界が一気に、世界を置き去り、目の前には目を見開いたライの顔。

シシオウ・ブレードの柄頭を、ライの腹部に叩き込む。

「ぐほっ」

咳き込むライだが、私の攻撃は止まらんぞ！

一瞬、シシオウ・ブレードで打ちつけた衝撃で距離が開くが、ブースト中の私には直ぐに詰められる距離だ。

「シシオウ・ブレード！！」

シシオウ・ブレードを抜き放ち、残像が残る程の高速で、計9回の連続切りを放つ。その合間正に一秒にも足らず。

そして最後の一太刀。9回目の斬撃後鞘に収めた刃を神速の速度で抜き放つ。居合い切りという抜刀術だ。

ライの脇をすり抜けながら一撃を放ったラウラは、まるで血を払うかのようにシシオウ・ブレードを払う。

「一刀両断ッ！」

鞘にシシオウ・ブレードを収めたと同時に、ライは膝から崩れ伏した。

「峰打ちだ。今日の出来事を教訓とし、日々精進するといい」

ＹＯＵ　ＷＩＮ

３日振りの最初の戦いは、幕を閉じた。

ACT・2（後書き）

謎の食通臭全開のラウラでした。

これで良かったのだろうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8161x/

武装神姫-造作剣客戦記-

2011年10月26日06時35分発行